印象事例からみる訪問看護ステーション実習における学生の学びの実態

小楠　範子，木村　孝子

要　旨

訪問看護ステーション実習における学生の学びの実態を明らかにするために，学生が体験した訪問看護実習の中での印象事例の分析を行った。

研究参加者は，老年看護学実習を終了した3年次生で，調査への同意，協力が得られた学生，47名である。訪問看護実習の中での印象事例，およびその印象事例をあげた理由について問い，自由記述で回答を求めた。

印象事例を分析した結果，〈介護者である家族からの学び〉〈老々介護の実態の衝撃と学び〉〈介護者である家族の意向を重視したケアの工夫〉〈家族のケアの認識と必要なケアの乖離に伴う困難〉〈初めて出会う事例へのとまどい〉〈一対一でかかわる訪問看護師の魅力の発見〉〈利用者の役に立った実感とよろこび〉の7つの印象事例が抽出された。

結果からは，学生が利用者だけでなくその家族にも焦点をあてていることが明らかとなった。訪問看護ステーションをフィールドとした実習は，健康障害をもちながら在宅で生活する高齢者だけでなく，その介護者である家族のケアのありようについて学ぶことを可能にするといえる。また，学生は老々介護の実態についても学んでいた。訪問看護ステーションは，高齢者の介護における現状と課題について学ぶことのできる実習フィールドといえる。しかしながら，本研究においては，訪問先で学生が今まで見たこともない事例に遭遇し，とまどっている実態も明らかとなった。今後は，訪問先でとまどいを感じたり，後悔するような出来事に遭遇した学生の体験をひとつの学びの体験に変えていくような働きかけについて検討していくことが求められる。

キーワード：老年看護学，老年看護学実習，訪問看護ステーション，家族ケア，高齢者

Ⅰ．はじめに

本学における老年看護学実習の目的は，老年期にある対象を理解し，加齢に伴う変化と健康課題について理解を深めること。そして，高齢者とその家族に必要な健康支援の知識を広め，適切な看護実践ができる能力を養うことである。

この目的を達成するために，本学は1994年の開学以来，老人福祉施設をフィールドとして老年看護学の実習を行ってきた。しかしながら，老人福祉施設だけでは，老年期にある対象を理解し，加齢に伴う変化や健康課題に

鹿児島純心女子大学看護栄養学部看護学科

ついての理解を深めることはできても，加齢に伴う変化や健康課題をかかえた高齢者と共に生きる家族にまで焦点をあてることができないという限界があった。そのため，2005年より訪問看護ステーションを実習フィールドとして追加し，学生は老人福祉施設と訪問看護ステーションの両方で老年看護学の実習を行うこととなった。

訪問看護ステーション実習に関する研究はこれまでも複数行われている。研究の対象も実習先の訪問看護ステーションの職員を対象としたもの[1),2)]，学生を対象とした研究などがあり，学校側と実習施設の両面から検討が行われている。学生を対象とした研究では，訪問看護ステーション実習における学生の看護技術経験の実態を明らかにしたもの[3)]，アンケート調査より訪問看護ステーション実習における学生の達成度に関する自己評価を検討したもの[4)]がある。また，実習記録などから学生がとらえる家族について明らかにしたもの[5,6)]などがある。同行訪問の事例に焦点をあてたものとしては，学生の実習記録から訪問看護ステーション実習における同行訪問事例の特徴について明らかにしたもの[7)]があるが，この報告からは訪問事例の主要疾患，年齢的な特徴，主なケア内容について理解できるものの，学生が訪問事例の中から何を学び，どのような体験をしているのかまでは読み取れない。

本研究の目的は，訪問看護実習の中での印象事例の分析をとおして訪問看護ステーション実習における学生の学びの実態を明らかにすることである。そして，老年看護学実習の中で訪問看護ステーション実習を行うことの意義と課題について検討する。

Ⅱ．研究方法

1．研究参加者

老年看護学実習を終了した3年次生で，調査への同意，協力が得られた学生，47名。

2．データ収集方法および分析方法

1）データ収集方法

老年看護学の臨地における実習終了後，学内でのまとめの時間を利用し，アンケート調査を行った。訪問看護実習の中での印象事例，およびその印象事例をあげた理由について問い，自由記述で回答を求めた。調査用紙は，参加者に直接手渡し，教室に回収箱を設けて回収した。

2）データ分析方法

記述事例を繰り返し読み，複数の内容を含んでいるものは一事例毎に整理した。その上で記述を類似の内容ごとにまとめ，カテゴリー化していった。分析の過程では，老年看護学にかかわる担当教員で意見交換し，妥当性の確保につとめた。

3．倫理的配慮

研究参加者には研究の趣旨および方法を口頭と文書で説明し，研究参加を断っても実習成績には一切関係のないこと，研究以外の目的でデータを使用しないこと，得られたデータは個人が特定されないよう配慮する旨を伝え，書面による同意を得た。また，研究参加が強制にならないよう単位認定者以外の者が説明を行うなどの配慮を行った。

Ⅲ．本学における老年看護学の実習体制

結果を述べる前に，本学における老年看護学の実習体制，特に訪問看護ステーション実習体制について述べる。

1．学生の配置と実習日数，実習時期

1グループは5～6名で構成されており，

学生は老年看護学実習の中で福祉施設と訪問看護ステーションでの実習を行っている。訪問看護ステーションの実習施設は4ヶ所あり，学生はそのいずれかで実習を行う。そのため，学生の配置は1訪問看護ステーションにつき1～2名となる。実習日数は，看護基礎教育の中で，基本的な在宅看護の最低限の実習が可能[8]といわれている3日間である。また，全ての学生が同時期に訪問看護ステーション実習を行うことは，フィールド確保の点で限界があり，学生が実習を行う時期は，成人看護学やその他の領域の実習前であったり，他の領域の実習が全て終了した後であったりと様々である。

2．教員の指導体制

老年看護学実習を担当する教員が，各訪問看護ステーションを巡回しながら学生を指導している。

3．学生の主な実習内容

同行訪問が中心である。訪問件数は，1日2～5件と訪問看護ステーションによって幅がある。同行訪問以外の時間は，同行訪問したケースのまとめ，あるいは次に同行訪問するケースについて事前に調べる時間として用いている。実習期間中のカンファレンスの実施はなく，同行訪問したケースの疑問点については同行訪問した看護師に直接指導を受け，実習全般に関する疑問点については実習指導者あるいは管理者に聞く体制をとりながら，教員も随時指導している。

Ⅳ．結　果

47名の学生中，38名が印象事例を記述していた。学生の記述の中で，複数の内容を含んでいるものを整理し，最終的に41の印象事例を抽出した。41の事例を分析した結果，〈介護者である家族からの学び〉〈老々介護の実態の衝撃と学び〉〈介護者である家族の意向を重視したケアの工夫〉〈家族のケアの認識と必要なケアの乖離に伴う困難〉〈初めて出会う事例への戸惑い〉〈一対一でかかわる訪問看護師の魅力の発見〉〈利用者の役に立った実感とよろこび〉の7つに分類された。以下，各々について述べる。

1．介護者である家族からの学び

〈介護者である家族からの学び〉は，実際に訪問看護サービスを利用する利用者の家を訪問し，利用者だけでなく介護者である家族と接することで，介護の実態や苦労を学んでいることを指している。

在宅での介護体験のない学生にとっては，実際の介護の様子を目の当りにし，「介護者と話ができた」という事実だけでも印象に残る出来事であった。さらに，「家族の方が介護について熱心に教えてくださる」ことで，教科書では学べない家族の生の声を聞くことができ，様々な悩みや苦労を抱きながら介護を続けている家族の実態を知る機会となっていた。また，苦労だけでなく，自らの時間と介護時間とのバランスをとりながら介護を行っている家族が「介護を快適」と語ったことで，学生は介護者が自分の時間をもちながら介護していくことの大切さを学んでいた。そして，介護者が快適に介護を続けていくために看護師としてどのような配慮をしなければならないかを考えるきっかけともなっていた。

介護者である家族に直接話を聞くだけでなく，その介護の様子を見ることで，気づきを得ている事例もあった。例えば，脳性麻痺の子どもを約50年間介護している親の姿を目の当たりにした学生は，数十年来，施設を利用することもなく，介護を続けているという事

実に驚きを感じていた。また，人工呼吸器を装着している夫を約7年間介護し，吸引器や胃瘻の扱いに手馴れている妻の介護の様子を実際に見た学生は，介護者の支えがあって在宅での生活が可能になるということを実感していた。さらに，夜中に目覚ましをかけなくても自然に目が覚め，2時間毎の吸引を実施しているという介護者の話を聞くことで，介護者のもっている力を十分に引き出しながら在宅ケアを支えていく訪問看護師の役割の重要性を学んでいた。

一方で，介護者である家族と実際にかかわることで，在宅ケアの困難さについて学んでいる学生もいた。例えば，リウマチで四肢の変形があり自由に動けない利用者が肌寒い部屋の中にほとんどひとりで居り，介護者である夫もほとんど口をきかない状況の中で暮らしている現状を目の当りにした学生は，利用者である妻と介護者である夫の生活が「これからどうなるのだろうか」と心配に思い，それが強烈な印象事例として残っていた。疾病をかかえた不自由な体で在宅で暮らしていくためには，介護者の助けが不可欠である。だが，介護者から十分な助けが得られていない事例を見ることで，介護者の助けを得ることはそれほど容易いことではないことを実感していた。

2．老々介護の実態の衝撃と学び

〈老々介護の実態の衝撃と学び〉は，学生は授業で老々介護について学んでいたとしても，それを具体的にイメージ化するにはいたっていない。老々介護の家を実際に訪問し，その現実を目の当りにすることは学生にとっては衝撃的なことであり，学生はその大変さをひしひしと感じとっていた。

介護している妻や夫も決して健康そのものではない。介護者自身も80歳を超えており，要支援の状態やうつ病を患っている者，時には認知症の妻が身体介護の必要な夫を看ているケースもある。しかも，周りに民家も何もない山の中に二人だけで暮らしているケースもあり，環境的に恵まれた中で介護が行われているわけではない。様々な老々介護の実態を目にすることで，学生は「この事例は，緊急時にはいったいどうするのか」「こんなに高齢で，血糖測定やインシュリン注射を行い，おむつ交換も車椅子移動も行っていて介護者の体は大丈夫なのか。生活できるのか」「介護者の介護負担はこれからどうなるのか」「この二人の生活はこれからどうなるのか」と，それぞれの介護を含んだ日常生活の先々を危惧していた。そして，利用者だけでなく，その介護者の健康状態を気づかないながらケアをしていくことの重要性を実感していた。また，周囲にほとんど家がなく，老夫婦あるいは独居で生活しているケースでは，訪問看護師の役割は単なる身体的なケアにとどまらず，利用者や介護者とコミュニケーションをとることも重要性なケアのひとつであると実感していた。

学生は老々介護の大変さを実感するばかりでなく，老々介護を行っている高齢夫婦の姿から学びも得ていた。例えば，人工呼吸器を装着しながら長年暮らしている利用者とその介護者が笑顔で学生に接することで，学生は，病気や介護の辛さがあっても「こんなにやさしい表情ができる」ことに人生の先輩としての尊敬の念を抱いていた。また，高齢であっても介護者の手厚い介護や一生懸命な姿を見ることで，「こんなにがんばっている人がいるんだ」と感じ，人生の先輩に看護師としてどのように接していけばよいのかを考えるきっ

かけともなっていた。

3．介護者である家族の意向を重視したケアの工夫

〈介護者である家族の意向を重視したケアの工夫〉とは，実際に訪問看護に同行し，各家庭の環境や家族の意向にあわせた工夫を行いながらケアをすることの大切さを学んでいることを指している。

例えば，ケリーパッドの代わりにビニールの風呂敷を用いたり，利用者の手近にあるものを利用して清拭などを快適に実施できるよう工夫している訪問看護師の姿を実際に見ることで，「家庭であるものを利用して行う看護」のおもしろさや大切さを実感していた。また，看護師は自分中心の視点でケアを行うのではなく，ひとつのケアを展開するにも，絶えず利用者と家族の意向や立場を尊重し，「何をどのようにしたらやりやすく，かつ手間やお金がかからないか」という視点ももちあわせながら工夫していることを学んでいた。看護師が利用者の手近にあるものを利用して利用者のニーズを満たしていることに，学生は新鮮なおどろきと感動を味わっていた。

4．家族のケアの認識と必要なケアの乖離に伴う困難

〈家族のケアの認識と必要なケアの乖離に伴う困難〉とは，利用者の健康のためには行った方がよいと思うケアでも，介護者である家族の同意と協力が得られないことで，必要なケアが提供できない困難さを実感していることを指している。

学生は，利用者と家族の立場に立ち，絶えずケアの工夫を行っている看護師の姿に新鮮なおどろきを感じる一方で，家族の認識や価値観が看護師の視点とは異なり，必要なケアが十分に展開されない事例も体験していた。

例えば，利用者の皮膚の清潔を保ち，感染を起こさないためにも，看護師はオムツ交換をこまめに行う必要性を感じていた。だが，介護者は「オムツ代は高い」という理由でなかなかオムツを交換せず，オムツから尿が漏れ出している状態の利用者の排泄ケアを行う看護師に「オムツはさっき交換したばかりなのに」と口にする介護者の姿に学生は衝撃を受けていた。保清や感染予防の観点からは，無理やりにでも排泄ケアを行う必要がある。だが，介護者である家族の意向が必ずしもそうではないとき，看護師としてどのようにかかわればよいのか，学生は難しさを感じていた。

また，利用者の健康のためには生活環境を整えることも重要である。だが，動物の糞やえさが散らかり，物も散乱しているような住居環境の中で生活している事例を訪問し，「感染を起こしているため清潔にしておくことが大切だが，清潔が保てない」と，利用者や介護者の認識と療養のために必要なこととが乖離している現状に学生は戸惑いを感じていた。さらには，「訪問看護師はこんな家も訪問しないといけないのかと思うと嫌だと思った」と，訪問看護に戸惑いを感じている学生もいた。

5．初めて出会う事例への戸惑い

〈初めて出会う事例への戸惑い〉とは，今までの病棟の臨床実習でも全く出会ったことのない事例に住宅で初めて出会い，戸惑いを感じていることを指している。

例えば，まばたき以外には何もできないALS（Amyotrophic Lateral Sclerosis；筋萎縮性側索硬化症）の利用者と在宅で初めて出会うことで，学生は「初めてALSの方を見た。全介助の方も初めて見た」「驚いて何もできなかった」と述べるなど，机上の学習だけでは

具体的にイメージできていない疾患をもつ利用者を在宅で間近に見ることが，学生にとってはかなりの戸惑いであることが示された。

また，病棟の臨床実習では，比較的状態の落ち着いた患者を受け持つことが多い。そのため，病状の不安定な利用者，例えばがんを患っている利用者の入浴介助を在宅で初めて行った学生は，洗髪時に髪が抜ける現状に驚き，戸惑いを感じていた。だが，それでも何か声をかけなければという必死の思いで「髪がたくさん抜けていますよ」「血が出ていますよ」と見たままの様子を口にしてしまい，それがそのまま学生の後悔として残っている現状も示された。

6．一対一でかかわる訪問看護師の魅力の発見

〈一対一でかかわる訪問看護師の魅力の発見〉とは，訪問看護師が利用者宅を訪問している時間はその利用者のためだけに時間をつかい，その利用者にしっかりとかかわっている姿を間近に見，一対一でかかわることのできる訪問看護師の魅力を発見していることをさしている。

例えば，学生は，在宅で生活している利用者の「思いや悩みをしっかりと聴いている」訪問看護師の姿とともに，話を聴いてもらえることで「とてもうれしそうな」表情をしている利用者の姿の両方を見ることで，一対一でかかわることが利用者にとってどんなに大切なことであるかを感じ取っていた。また，訪問看護師が利用者のリハビリテーションを行うことで，利用者の訪問前と後の動きが見事に異なる事例を間近にみた学生は，一対一でかかわることが単にコミュニケーションを深めるだけでなく，利用者の身体機能の向上という効果をもたらすということを実感していた。

学生は，大勢の患者とかかわる病院の看護師と訪問看護師の姿を自ずと対比させ，一対一で利用者とかかわることのできる訪問看護師の魅力を一層強く感じていた。

7．利用者の役に立った実感とよろこび

〈利用者の役に立った実感とよろこび〉とは，数十分，あるいは1時間といったわずかな時間であっても訪問先の利用者と精一杯かかわり，利用者が感謝やねぎらいのことばを具体的に表現したりすることで，そのことばを受けた学生が，自らも利用者の役に立っているという実感を味わっていることをさしている。

例えば，訪問の帰り際に「もう帰っちゃうの」「また来てね」という言葉を利用者にかけてもらった学生は，その利用者が日ごろどんなに孤独で寂しい思いをしているのかを実感するとともに，わずかな時間ではあってもその利用者の話し相手となれたことによろこびを感じていた。また，言葉を出すことのできない利用者が，学生の声かけの一つひとつに笑顔で答えたり，表情で「ありがとう」というメッセージを送ってくれたことで，学生は「利用者にとって役にたっている」という実感を味わっていた。

V．考　察

1．利用者と共に家族をケアの対象としてとらえる視点

7つに分類された印象事例のうち，〈介護者である家族からの学び〉〈老々介護の実態の衝撃と学び〉〈介護者である家族の意向を重視したケアの工夫〉〈家族のケアの認識と必要なケアの乖離に伴う困難〉の4つは，利用者本人だけでなく家族を含めたものとなっ

ている。これは訪問看護ステーション実習において，学生が，利用者と共に介護者である家族をしっかり見つめ，かかわっていることのあらわれともいえるだろう。利用者だけでなく介護者である家族へ配慮しながらかかわる訪問看護に同行し，実際のケアを間近に見ることで，学生は，利用者だけでなく介護者である家族もケアの対象であることを認識することができたのだと思われる。

病院実習においては，患者が主なケアの対象者であり，家族はその背景としてとらえがちであり[9]，家族の重要性を説きながらも，家族への配慮まではなかなかできない現状もある。訪問看護ステーションでの実習は，介護者の考え方や健康状態，生活感覚がそのまま利用者のケアに影響するため，自ずと利用者だけでなく，その家族にもケアの視点が向けられるものと思われる。川越ら[8]は，訪問看護実習で学んでほしい観点のひとつとして「家族とは何か」ということをあげているが，訪問看護ステーションをフィールドとした実習は，健康障害をもちながら在宅で生活する高齢者だけでなく，その介護者である家族にも焦点をあて，そのケアのありようについて学ぶことを可能にするといえる。

2007年度より，本学における老年看護学実習は，家族ケア実践という名称に改変された。学生の記述からは，訪問看護ステーションでの実習が高齢者を理解するだけにとどまらず，家族を視野に入れた学びにつながっているといえ，今後は，このような家族を含めた学生の気づきを記録の中にどのように反映させ，病棟での実習にどのように反映させていくかを検討していくことが課題となる。特に，ひと言で家族とはいっても，学生はそれぞれの訪問先でそれぞれの家族のありようと，家族の数だけのケアのありようを実感し，学んでいる。訪問看護ステーションでの実習は，1名ないし2名の配置で複数箇所で行われているため，教員の指導も巡回指導となり，臨地実習だけでは学生の学びが十分に整理されているとはいえない。今後は，学内実習において，家族を含めた学びをどのような形でまとめ，その学びをどのように共有していくかについて検討していくことも重要な課題である。

2．疾患をもちながら在宅で生活する高齢者の実態からの学び

本研究において学生は，老々介護の家を実際に訪問し，その現実を目の当たりにすることでかなりの衝撃をうけ，老々介護の大変さをひしひしと感じ取っている現状が明らかとなった。

本学が位置する鹿児島県薩摩川内市の2006年の高齢化率は26.4％であり，全国の高齢化率20.8％を上回る。後期高齢者の占める割合が年々高まっているのも特徴である[10]。また鹿児島県内の一般世帯数に占める高齢単身世帯の割合は2005年で14.1％（全国平均は7.9％），高齢夫婦世帯の割合は13.9％（全国平均は9.6％）といずれも全国平均を大きく上回り全国一位という現状である[11]。同じく2005年の調査において薩摩川内市の高齢者のうち約20％が要介護認定を受けており，鹿児島県においては在宅の要介護認定者のうち約5割に認知症症状が認められるともいわれている[12]。これらは，疾患や身体の障害，認知症をもちながらも高齢者単身で，あるいは高齢夫婦で在宅で生活している高齢者が多数いることも示しているだろう。鹿児島県は全国平均に比べ約10年先行して高齢化が進行しているともいわれており，学生は訪問看護ステーションでの実習において，地域の現状に応じた高齢者

の在宅での介護問題に直面しているといえる。いいかえると，訪問看護ステーションは，疾患をもちながら在宅で生活する高齢者の現状と課題について学ぶことのできる実習フィールドといえる。高齢者は退院後も継続した医療や看護を必要としており[13]，訪問看護ステーションをフィールドに実習を行うことは，疾患をもちながらも在宅で生活する高齢者やその家族を支えるために必要な看護の視点を養う学習の場となり得るであろう。

高齢者の看護においては，老化や老年病という部分的変化のみに目を向けるのではなく，日常生活面という全体性に注目して援助を与える必要があるといわれている[14]。学生の記述の中には，「この二人の生活はこれからどうなるのか」「生活は大丈夫なのか」といったものもあり，住み慣れたわが家で高齢者がその人らしく生活していくためには，単に疾患に注目するだけでは足りず，利用者を含めた家族の日常生活を視野に入れたかかわりが必要であることを学生はしっかりと感じ取っているといえる。在宅という生活の場を訪問することは，単に医学モデルではなく，生活者の視点で[15),16]利用者あるいはその家族を見ていくことを可能にしているといえるだろう。

また，「この二人の生活はこれからどうなるのか」「生活は大丈夫なのか」といった記述は，高齢者単身での生活，あるいは老々介護を支えるためには，一日のうちの限定された時間の訪問看護の介入だけでは足りないということを学生が感じ取っていることのあらわれともいえる。これは，高齢者が疾患や障害をもちながら在宅で生活していくために，訪問看護以外に，どのような社会資源が活用できるのかを考える動機づけにもなり得るであろう。学生の気づきを活かしながら，社会資源の活用，保健医療福祉の統合についても考察できるような学習の方向づけが必要になってくるといえる。

3．重症事例を訪問することへの課題

本研究においては，訪問先で学生が今まで見たこともない事例に遭遇し，とまどっている実態が明らかとなった。本学における訪問看護ステーションでの実習は，同行訪問が主であり，疑問点については随時指導者に聞く体制をとっており，実習担当者や教員が入ったカンファレンスの時間を特別には設定していない。これは，訪問看護ステーション側の時間的な限界，複数箇所で実習を行っているため教員の指導が巡回指導にならざるを得ないことから生じる限界である。一般に，実習期間中は実習担当者と連携しながら，カンファレンスで的確な助言・指導を受ける体制を整えることが望ましい[17),18]といわれており，実習担当者や教員が入ったカンファレンスを実習期間中にもうけられない現状を今後どのように改善していくかが重要な課題になる。

特に，2007年には訪問看護ステーションの業務基準に関する検討報告書も出され，がん患者や高齢者の在宅医療により的確に対応する訪問看護が求められるようになっている。がん療養に対する支援では，どこで生活していても予防・治療やがん緩和ケアを十分に受けられるようにすることが求められており，高齢者のターミナル支援や難病患者に対する支援も訪問看護ステーションに期待される役割のひとつとなり，クリアすべき業務基準が示されている[19]。これらの現状は，今後学生が訪問看護ステーション実習において，がんの治療を受けながら生活している利用者やターミナル期の利用者，難病をもちながら生活する利用者へ同行訪問する機会が増えることを

示してもいるだろう。

テキスト上で難病やがんの治療の現状，ターミナル支援について学んでいたとしても，日常生活の中でそのような事例と身近にかかわったことのない学生は，具体的なイメージができず，臨地実習において実際にそのような事例に遭遇した場合，驚きや戸惑いを感じているのだと思われる。赤坂ら[20]は，実習中に患者とのかかわりで戸惑いを感じた学生に対して教員が教育的にかかわることで戸惑いは一時的なものとなり，学生は状況を把握することで冷静になることができていると報告している。戸惑いや後悔するような出来事に遭遇した学生の体験をひとつの学びの体験に変えていくためには，従来どおり教員も巡回という形ではあっても学生の実習の場に赴き，実習での体験を聞いたり，疑問を聞いたりしながら必要な指導を行うことが求められるだろう。また，戸惑いを学びに変えていくためには，振り返りの面接[20]を通して，学生自身が体験した状況を冷静に省みることができるようなサポート体制が不可欠であり，訪問看護ステーション実習終了後の学内での学習の機会を利用し，これらの体制を整えていくことが求められる。さらに学生のそれぞれの体験を共有し，学びあう機会をもつことが重要であろう。

VI. まとめ

訪問看護ステーション実習における学生の学びの実態を明らかにするために，学生が体験した訪問看護実習の中での印象事例の分析を行った。その結果，〈介護者である家族からの学び〉〈老々介護の実態の衝撃と学び〉〈介護者である家族の意向を重視したケアの工夫〉〈家族のケアの認識と必要なケアの乖離に伴う困難〉〈初めて出会う事例への戸惑い〉〈一対一でかかわる訪問看護師の魅力の発見〉〈利用者の役に立った実感とよろこび〉の7つの印象事例が抽出された。

結果からは，学生が利用者だけでなくその家族にも焦点をあてていることが明らかとなり，訪問看護ステーションをフィールドとした実習は，健康障害をもちながら在宅で生活する高齢者だけでなく，その介護者である家族のケアのありようについて学ぶことを可能にするといえる。また，学生は老々介護の実態についても学んでおり，訪問看護ステーションは，高齢者の介護における現状と課題について学ぶことのできる実習フィールドといえる。しかしながら，本研究においては，訪問先で学生が今まで見たこともない事例に遭遇し，とまどっている実態も明らかとなった。今後は，訪問先で戸惑いを感じたり，後悔するような出来事に遭遇した学生の体験をひとつの学びの体験に変えていくような働きかけについて検討していくことが求められる。

謝　辞

研究にご協力いただいた研究参加者の皆様に心よりお礼を申し上げます。

参考文献

1）岩本里織，野村美千江：訪問看護ステーション職員の看護学生実習に対する意識．愛媛県立医療技術短期大学紀要，13：27－34，2000

2）加藤欣子，平野憲子，和泉比佐子，工藤康子，野地有子：看護学生の在宅看護実習に対する訪問看護ステーション指導者の受けとめ．札幌医科大学保健医療学部看護学科，5：65－77，2002

3）大村由紀美，泰　桂子，時松紀子，中村喜美子：訪問看護ステーション実習における学生の看護技術経験の実態．看護科学研究．6(2)：27－32，2006
4）植村小夜子：訪問看護ステーション実習の達成度と課題；2004年度の学生の自己評価からの検討．京都市立看護短期大学紀要，30：97－103，2005
5）神田りつ子，落合清子：訪問看護実習において学生が捉えた“家族”．聖隷クリストファー大学看護短期大学紀要，25：34－42，2002
6）島田千恵子：看護学生の家族の捉えかた．順天堂医療短期大学紀要，12：14－24，2001
7）乗越千枝：訪問看護ステーションにおける臨地実習の同行訪問の状況；学生実習記録から．日本赤十字九州国際大学紀要，3：35－44，2005
8）川越博美，長江弘子，錦戸典子，成木弘子，久代和加子，成瀬和子：訪問看護ステーションにおける効果的な訪問看護実習のあり方の検討．聖路加看護大学紀要，25：25－40，1999
9）伊藤真由美，野島佐由美，高崎絹子，島内　節：看護における家族研究の現状と課題．看護研究，22(5)：438－453，1989
10）鹿児島県の高齢化率（2006年）：http：//www.pref.kagoshima.jp/kenko-fukushi/koreisya/koreika/koureikaritu.html
11）高齢者世帯の状況（2005年）http：//www.pref.kagoshima.jp
12）認知症高齢者の将来推計（2006年）http：//www.pref.kagoshima.jp
13）柳原清子：在宅看護論実習での核となる学習内容；訪問看護ステーションは何を学ぶ場なのか．訪問看護と介護．6(8)：635－653，2001
14）柳原清子，千葉京子，有馬千代子：老人看護実習における病棟実習から訪問看護ステーション実習への転換；医学モデルから生活モデルへ．日本赤十字武蔵野女子短期大学紀要，9：21－29，1996
15）木下康仁：老人ケアの人間学．第1版，医学書院，東京，1993
16）Germain, C, B. 他著／小島蓉子編訳：エコロジカル・ソーシャルワーク．第1版，学苑社，1992
17）齋藤ゆみ：授業としての臨地実習；臨地実習の教育的展開から学べるもの．看護教育，37(2)：115－120，1996
18）湯舟貞子，阿賀恵津子，野々口利枝，神田裕子，川畑千代乃，藤原由佳，永渕友子，中井美子：専門分野のカリキュラム案と展開；学生に多くの場と看護活動を学ばせたい．看護展望，22(2)：87－91，1997
19）川村佐和子，上野桂子：訪問看護ステーションの専門性を高める条件を表した「業務基準」とは．コミュニティケア，9(9)：12－15，2007
20）赤坂憲子，小濱優子，真部昌子：対象の症状悪化に戸惑う看護学生の教育方法の一考察（第一報）：「危機体験」の面接を試みて．川崎市立看護短期大学紀要，8(1)：21－27，2003

The actual learning in home visit nursing station ; Through the analysis of the impression cases

Noriko Ogusu, Takako Kimura

Department of Nursing, Faculty of Nursing and Nutrition,
Kagoshima Immaculate Heart University

Key Words : gerontological nursing, gerontological nursing practice, home visit nursing station, family care, old people

Abstract

The purpose of this study is to clarify what the students have actually learned in home visit nursing station practical training. The research participants are the 47 students who finished practical training in home visit nursing station. They were asked to write freely about the impression of their practical training and its reasons.

As a result of analysis of the impression cases, seven cases were extracted as follows : 1) the learning from the family who care the old people, 2) the mutual nursing of old people by husband and wife, 3) old people care with the intention of the family, 4) the difficulty in care caused by different recognition between the family and the nurse, 5) the bewilderment at the first sight of the new case, 6) the attractiveness of the visiting care, 7) the joy of caring of the old peopole.

The analysis shows clearly that the students have focused on not only the old people but also the family. Also, we can see that practical training in home visit nursing station studies makes it possible to learn about care of the family as well as about the old people who need care. Also, the student had learned the actual condition of the old couple nursing. The home visit nursing station can be regarded as an effective practical training field to study the real situations and problems in the nursing of old people.

At the same time, we cannot over look the fact that some students have experienced the new cases which they had not seen in the course study, which made them puzzled. In the future, it is necessary to consider how to change these puzzling experiences into actual learning experience. We should provide the students with the chance to cope with these puzzlement.